



フジタイゲキ

フジタイゲキ *Euphorbia watanabei* Makino subsp. *watanabei* は、富士山麓で Junshiro Watanabe (漢字名不明) が 1916 年 7 月 25 日に採集した標本を基に、牧野富太郎博士が 1920 年に新種として発表した、トウダイグサ科の多年草である。環境省のレッドデータブック (2000) では、絶滅危惧ⅠA 類 (CR) に指定されこともある貴重な植物である。草丈 150cm ほどで、花は目立たないが、5 月下旬から 6 月の花期には苞葉が黄色に色づくので、遠くからでもそれと分かる。

『静岡県植物誌』(1984) には 10 箇所ほどの産地記録があり、1950 から 60 年代に筆者も達磨山、有度山、高草山で生育を確認している。1990 年代になり絶滅危惧種の調査で、これら記録のあるすべての産地を調査したが全く発見できず、植生の遷移や開発が原因で絶滅したと思われる。ところが、1996 年になり島田市の静岡空港建設地で、筆者により 30 株ほどが再発見された。このことが契機になり、その後、菊川市と掛川市でも発見されたが、現在でもこの 3 市以外では発見されていない静岡県の固有種である。

自生地ではいずれも限られた狭い範囲に群生する。自生地には共通性があり、ネザサまたはススキの草原である。調査したところ、いずれも茶畑に敷く草の採草地 (茶草場) であった。茶草場では毎年秋に草刈りをするので草地が継続して維持され、県内の他の地域では絶滅した、フジタイゲキが生き延びることができていたのである。茶草場にはキキョウなど草原性の植物や昆虫も豊かで生物多様性に富んでいる。

茶草場を決め毎年秋に草を刈り茶畑に敷く、この伝統的な茶草場農法による茶の生産が草地を維持することになり、このことが現在重視されている生物多様性の保全と両立しているとして、2013 年に「世界農業遺産」に認定された。その切掛けになったのは、静岡空港でのフジタイゲキの再発見であった。

なお、現在フジタイゲキの自生地での生育は良好である。静岡空港では自生地の生態調査に基づいた保全を図り、1,500 株ほどに増殖したこともあり、絶滅の危険度が弱まってとして、環境省のレッドデータブック (2014) では絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に指定替えされている。